

ポリロタキサンの構造とダイナミクス



 東大新領域
 〇 眞弓 皓一、横山 英明、伊藤 耕三

 東大物性研
 遠藤 仁、柴山 充弘

 NIST・インディアナ大
 長尾 道弘



D. Richter, M. Monkenbusch, A. Arbe, and J. Colmenero, Adv. Polym. Sci., 174, 1 (2005)

ポリロタキサン



A. Harada, J. Li, M. Kamachi, Nature 356, 325 (1992)









ポリロタキサンの部分散乱関数





ポリロタキサンの静的構造



試料 h-PEG d-CD (PEG is mainly visible) dh-PEG h-CD (PEG matching) h-PEG h-CD (full contrast) × ° ° ° ° dh-PEG (d-monomer 70%) 8x10¹ dh-PEG PEG分子量:20,000 DMSO-d SLD[cm⁻¹] CD包接率: 30 % 4 h-CD d-CD h-PEG \sim I 溶媒: DMSO-d₆









末端切断による脱包接ダイナミクス



ポリロタキサンの分子ダイナミクス











離散化の効果



結論 SANS

ポリロタキサン希薄溶液の散乱関数からコントラスト変調法によって部分 散乱関数を求めた

S_{cc}(Q)を離散化Worm-like chain modelによって解析したところ、ポリロタ キサンの持続長I_pは54 Åであり、PEGの約5倍であることが分かった

NSE

コントラスト変調法をNSEに適用して、ポリロタキサン溶液の中間相関関数を $S_{CC}(Q,t), S_{PP}(Q,t), S_{CP}(Q,t)に分解したところ、全て一致した$

S_{CC}(Q.t)に関しては、CDの離散化とスライドの効果を考慮する必要があ り、慎重に取り扱わなければならない